

ART KISS LETTER

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

vol.47

FREE

EARLY
SUMMER
[2010.初夏号]



巻頭言

「祝祭と祈りのテキスタイル」展によせて - テキスタイルとは？

熊本市現代美術館館長 桜井武

この春から夏にかけて日本の刺子展(熊本ではドンザという)が英国国内を巡回し、注目を集めている。一方ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館では、この時期に「キルト 1700-2010」という英国の300年に渡るキルトやパッチワークの歴史を見渡す大がかりな展覧会が開催中である。刺子やキルトやパッチワークも素材は布であり、ファブリックを含め織物を総称してテキスタイルと言う。そして長い年月にわたり人間が生み出してきたテキスタイルのアートに現在、国際的再評価が高まっている。

今回の「祝祭と祈りのテキスタイル」展では、なじみが薄いという理由でこのテキスタイルという言葉が展覧会タイトルに使うかどうか館内で議論された。しかし今や海外ばかりか国内企業名にも使用され、プロの仕事としてのテキスタイル・デザインがあり、またテキスタイルはファッションを語る時に欠かせない言葉でもある。熊本市現代美術館では、これからファッションも本格的に展開していきたいと考えており、あえてテキスタイルを「布」としないでそのままタイトルに使用し、市民の間でこの言葉がアートやデザイン、そしてファッションにつながり、広がりをもつことを願ったものである。

「祝祭と祈りのテキスタイル」

出品作家によるアーティスト・トーク

「祝祭と祈りのテキスタイル」出品作家の手塚愛子さん、齋藤芽生さんをゲストに迎えたアーティスト・トークを開催しました。桜井館長が聞き手となり、制作に対する思いや本展に出品しての感想、今後の制作や展覧会についてなど作家自らの言葉で語られる秘話に夢中で聞き入るあつという間の1時間半でした。

本展出品作の《落ちる絵》に象徴される歴史そして美術史の「表と裏」をまっすぐに見つめる手塚さんの態度、また、市井の中でささやかに生きる人間のいじらしさを、シニカルに時に愛情を持って、徹底的に見据える齋藤さんのまっすぐな姿勢に、観客の皆さんも深く共感されていたようでした。参加者は80名でした。(A.S)

齋藤芽生さん

手塚愛子さん

museum
information

熊本県現代 美術館の活動

日本画家 松井冬子さん、東海大学阿蘇キャンパスに滞在、素描制作

2010.3.2-3.5

この夏の展覧会「小泉八雲生誕 160 年記念・来日 120 年記念 へるんさんの秘めごと」展の出品作家の松井冬子さんが、東海大学農学部森友靖生先生の受け入れのもと、3 日間、子牛の解剖図の素描を制作しました。小動物の解剖の経験はあっても、子牛の解剖現場は初めての松井さん。病理学の研究を行う森友先生の指導のもと、生徒さんが作業をすすめると殺・解剖の現場は初めてで、非常に緊張した表情だったのですが、「貴重な生命をいただくのですから、私も一生懸命描きます」と、決意。3 日間、朝から夕方まで、休みなして、寒い解剖室のなか、一心不乱に素描を描き進めていました。最後の日には、森友先生をはじめとして研究室のみなさんが、完成に近づく素描のまわりで、感動の声をあげてください、松井さんもにっこり、皆で記念撮影を行いました。翌日、松井さんは、「もう少し描き込みたいです！」と充実の表情で、帰京されました。「へるんさんの秘めごと」展には、この素描をもとにした本画を初出品していただく予定です。(H.T)



第 5 回お話し玉手箱 LIVE

2010.3.7

第 5 回お話し玉手箱 LIVE が開催されました。語り手は RKK アナウンサーの本田史郎さんと福島絵美さんです。今回の演目は夏目漱石の「坊っちゃん」と宮沢賢治の「よだかの星」でした。

「坊っちゃん」では下宿のおばあさんと坊っちゃんのユーモラスな掛け合いが演じられました。そして続く清の手紙の部分では、心に沁みる声で読み上げられる「坊っちゃん」の言葉に会場は少ししんみりとなりました。

「よだかの星」では健康なよだかの悲しく美しいお話が優しい声で語られました。童話のかたちをとりませんが、お話しのもつ自己存在への問いかけは大人の心にも静かに迫ってきます。会場にいらっしやうした方々も、静かに耳を傾けお話しの世界に没頭していました。(M.F)

【参加人数：70 人】

なお、この第 5 回お話し玉手箱 LIVE のラジオ開催告知が、先日、アノンシスト賞の九州・沖縄審査の CM 部門で最優秀賞を受賞しました。



熊本の華人展 vol.6 ザ・いけばな

前期 2010.3.20-3.22 後期 2010.3.26-3.28

当館の恒例企画、「熊本の華人展 vol.6」が開催。今年は「強さ」をキーワードに、「継続のチカラ」「伝統のチカラ」「花のチカラ」「いけばなの可能性（底力）」の 4 つのコーナーを設けてみました。まず「継続のチカラ」として、2002 年から当館のいけばなギャラリーに生けていただいているいけばなの写真 1832 枚でお出迎えしました。いけばな実行委員会に登録されている 21 流派の紹介コーナーでは、各流派の紹介に加え、各流派独自の生け方の説明文を参考に、畳に座っていけばなを眺めていただけるよう工夫しました。また「花のチカラ」のコーナーでは、「生命力」「造形力」「対応力」とさらにテーマを設けることで、華人と花とのコラボレーションを楽しんでいただきました。最後の「いけばなの可能性（底力）」は恒例の当館とのコラボレーションコーナーで、今年は日本が世界に誇る漫画とコラボレーションしていただき、華人の豊かな感性と想像力が思う存分味わえる楽しい空間になりました。「花の大好きな母と来ました。だんなさんも一緒に。今までのわたしの考えていた花の生けかたとは違い、大変おどろき、素敵だなと思いました。また見に来たいです。」(アンケートより)(E.Z)



熊本の華人展 vol.6 ザ・いけばな ワークショップ

・Message of Flowers ～届いてますか？お花の気持ち～
・携帯カメラワンポイントレッスン

前期2010.3.20-3.22 後期2010.3.26-3.28
2010.3.21

今年の華人展では、展示会の会場内で行う、お花とよりふれあうことのできる2つのイベントを企画しました。会期中毎日行ったのは「Message of Flowers ～届いてますか？お花の気持ち～」です。みなさんには、花言葉からイメージするお花の名前を、会場内に設置してある回答用紙に記入していただきました。正解者には次の展示会のペアチケットが当たるとあって、23人の方が楽しみつつも真剣に答えてくださいました。ちなみに、正解者が多かったのは「なつかしい思い出」という花言葉を持つスイートピーでした。2つ目は、「携帯カメラワンポイントレッスン」です。手軽だけれど以外に難しい携帯カメラの撮影も、ちょっとしたコツでねらい通りの写真が撮れるポイントをスタッフが伝授。参加者の方からは、「庭に咲いたお花を今度からは綺麗に撮ることが出来ます」との嬉しいお言葉をいただきました。(C.T)

【参加人数：7人】



祝祭と祈りのテキスタイル展プレイイベント ひびのこづえワークショップ「虫をつくろう」

2010.3.21-3.22

晴天にめぐまれた3/21、22の連休に「祝祭と祈りのテキスタイル」展出品作家でコスチュームアーティストのひびのこづえさんを講師に迎えた「虫をつくろう」ワークショップが行われました。なんと、3回あわせての参加者は156名！たくさんの方にご参加いただき、充実したワークショップとなりました。初めに、自分が作りたい「虫」のデッサンを描き、いざ本番！使用する素材が舞台衣装に使われていたものということで、普段目にする機会の少ないユニークな布やカラフルな色、煌びやかなビーズなどのパーツにみなさん興味津々で、素材選びにも熱が入りました。きれいにたたまれ仕分けられた素材からは、ひびのさんの布に対する愛情が感じられ、会場に流されている過去の作品のスライドショーなどを見ながらみなさん更にアイデアを膨らませている様子でした。家族やお友達、単独でのご参加などいろんな方がいらっしゃいましたが、制作の間は自分だけの「虫」を作るべく黙々と針と糸を動かす姿が印象的でした。できあがった「虫」は、手のひらサイズから30cmほどの大作まで様々で、素材選びや合わせ方に個性の光るユニークな作品となりました。これらの「虫」たちは本展のひびのさん展示スペースに作品として展示され、会場の賑わいに華を添えてくれています。(S.Y)



CAMK「読みがたり」

2010.2.13.&3.13.&4.17

第6回 2010.2.13 テーマ：「あったかいおはなし」

【参加人数：22人】

寒い冬に負けないように体を大きく動かす手遊び歌に、心も体もポッカポッカになりました。

第7回 2010.3.13 テーマ：「春うらら」

【参加人数：26人】

プログラムの「わらべうた」では本物のタケノコやツクシが登場し、子どもたちは興味しんしん！CAMKにいち早く春が訪れました。

第8回 2010.4.17 テーマ：「むかしむかし」

【参加人数：12人】

親しみ深い日本の民話から外国のお話まで幅広い絵本をお届けしました。紙芝居の「へびり女房」では、思わずふきだしてしまってお客も。エプロンシアター「さるかにがっせん」も初公開！子どもも大人も目が釘づけでした。(C.T)



ミュージック・ウェーブ No.29

樹原涼子「親子で楽しめる歌とピアノのコンサート」

2010.3.14

樹原涼子さんをお招きして、ミュージック・ウェーブ「親子で楽しむピアノと歌のコンサート」を開催しました。ピアノを楽しく弾く手遊びをしながらの合唱から、大人の女性の気持ちを込めたしっとりとした曲まで、子供と大人をとりこにする素敵なコンサートでした。参加人数は約100人の大賑わいでした。(A.A)

【参加人数：約100人】



ミュージック・ウェーブ vol.30

第1回オハイエくまもと とっておきの音楽祭

2010.3.28

仙台からスタートした、障害のある人もない人も、音楽のチカラで心のバリアフリーを目指す「オハイエ とっておきの音楽祭」が、「オハイエくまもと とっておきの音楽祭」として開催。当館では14組のみなさんが、コーラス、ピアノ、トーンチャイムなどさまざまなジャンルで日頃の練習の成果を発表されました。熊本の華人展会期中ということで、「花のまわりで」「さくら」などを選曲くださり、終始和やかなムードで行われました。(E.Z)

【参加人数：約200人】



第76&77回 詩の朗読会

2010.3.25 & 2010.4.22

第76回、3月の詩の朗読会、テーマは「駅」でした。10名の方が詩作を発表されました。駅をテーマにしつつも、やはり語られる季節は春で、下り立った駅の、菜の花が満開であったり、電車が来るのを待つ駅の桜が満開だったり、春の花を歌うものが快く聞こえました。また、駅でほっと一息ついている瞬間に、目に映る景色に春を語るものもいくつか耳にしました。駅からの出発前の高揚感、駅で待つゆっくりとした時間、到着駅での安心感、と節目が刻まれていく旅路というものを感じさせるものもありました。

第77回、4月の詩の朗読会、テーマは「阿蘇」でした。12名の方が詩作を発表されました。熊本に住む私たちにとって身近な存在の「阿蘇」をテーマに、どのような詩が作られるのか興味津々でした。畏怖、憧れ、祈りなどのほかにいろんな色で語られる阿蘇が新鮮でした。(H.T & E.Z)

CAMKEES 総会を行いました

2010.4.3

熊本市現代美術館ボランティア、CAMKEESの皆さんと総会を開催しました。総会という改まった印象ですが、今年1年の目標や活動について話し合う会です。CAMKEESの活動は多岐にわたるため、普段は内容によってグループに分かれて、班ごとに活動しています。その班を横断する交流として、研修旅行、新年会、定期的な茶話会なども開催していますが、総会は、年度の始めに班を超えて今後の活動を話し合う大切な場です。今回は、1年間のスケジュールを確認しながら、研修旅行、新年会の担当班などを決めました。9月には、東京の世田谷美術館から100名近いボランティアさんが、見学にいらっしやいます。そのおもてなしや交流についても色々提案がありました。今年1年もCAMKEESの皆さんと楽しく充実した活動を行ってまいりたいと思います。(A.A)



「祝祭と祈りのテキスタイル」展 記念講演会「江戸の幟旗」北村勝史(幟旗研究家)

2010.4.11

「祝祭と祈りのテキスタイル」展 開幕2日目のイベントとして、幟旗研究家で本展に出品されている江戸の幟旗や筒描きのコレクターでもある北村勝史(きたむら・よしちか)さんを講師に招いての記念講演会を開催いたしました。「江戸の幟旗」というタイトルの付けられたこの講演会では、北村さんと幟旗との出会いや収集への決意、また、幟旗とそこに描かれたモチーフに込められた民衆の祈りや願いについてなど内容は多岐に渡りました。北村さんの幟旗に対する熱い想いと愛情がひしひしと感じられたこの1時間半、質疑応答でもたくさんの質問があがり、また、終了後には北村さんの周りに観客の方が集まってお話しをされるなど、講演会は大盛況の内に幕を閉じることができました。(S.Y)



【参加人数：約80人】

GIII vol.69 第15回熊本市シルバー文化作品展

2010.3.6-3.21

熊本市シルバー文化作品展は、熊本市老人クラブ連合会会員の皆さんによる展覧会です。今年も絵画、書、写真、手芸、工芸と幅広いジャンルの作品が約250点展示されました。井手賞は洋画《江津湖の夜明》を描いた田中進さん、最高齢賞は人形《戸坂》を制作された101歳の村田テイ子さんです。出品数は昨年を上回り、展示室いっぱい多彩な作品が並びました。生き生きとした作品の数々に、若者に負けないパワフルさを感じました。展覧会入場者数は、2782名でした。(M.F)



「平川なつみーデジャヴュな日常」展を開催しました。平川さんは、1987年生れの大分県出身、在住の若手作家です。これまで東京で作品発表を行ってききましたが、九州での発表、そして個展の開催は今回が初めてとなります。日常の情景や身近な人物を題材にしながら、画面に自身が見た夢や想像を密かに、時には大胆に挿入させた作品は、奇妙な光景として立ち現れます。この作品がもつ驚異は、私達の日常の営みにおける認識や記憶の曖昧さを、ユーモアを交えて鋭く指摘しているかのようです。また作品タイトルのフレーズは、私達の想像力を刺激し、作品がもつ世界をより豊かなものへとしています。

展覧会開催を記念して4月18日(日)には、ホームギャラリーにて、作家による公開制作を行いました。平川さんが熊本に来るバスから見た阿蘇の山の形状は、由布のそれとは趣が異なり、印象的だったようです。その阿蘇の風景に、目と口の動きによって独特の表情をする熊本の伝統玩具「おばけの金太」が茶目つ気たつぷりに配置されています。6時間強の制作時間中、途中経過を確認にいらっしやっつた方、長時間お付き合ひ下さった方など見学者の皆さんに見守られて作品は無事に完成しました！完成後の作品は、会場内に展示され、合わせて25点のアクリル画の出品となりました。(A.A)

【公開制作の見学参加人数：50人】



松本喜三郎墓前祭での講演 富澤治子「バチカン・ミュージアムの生人形」

2010.4.29

熊本出身の生人形師、松本喜三郎の墓前祭が、今年も菩提寺の浄国寺で開催されました。

今年は120回忌にあたり、美しい《谷汲観音像》(熊本県重要文化財)とともに、晴天のもとでこの日を迎えられることに、ご遺族と、松本喜三郎顕彰会の皆さまと、参加者のみなさまとともに喜びあいました。

記念講演として昨年夏にポーラ美術振興財団の助成によって行われた調査、「イタリアおよびバチカン・ミュージアム所蔵の生人形調査ならびに同時代(19世紀末より20世紀初頭)の日本コレクション調査」より、生人形に特化して調査内容を報告しました。バチカン・ミュージアムの民俗部門内のアジア・日本コレクションはまだ未公開でもあり、今回の講演会に参加されたみなさんも初めて見るバチカン所蔵の生人形の質の高さに驚かれていたようです。(AKL41号のWorld Newsに「イタリア生人形調査手記 2009年、夏」というエッセーを掲載しております。あわせてご参照ください)(H.T)

【参加人数：約50人】

日比野克彦さんと「MATCH FLAG PROJECT 2010 SOUTH AFRICA」を開催しました 2010.4.29

くまもと城下祭りの一環として、「MATCH FLAG PROJECT 2010 SOUTH AFRICA」を通町筋・下通・新市街の3カ所で開催しました。

今回は、6月11日から始まるワールドカップで、日本が対戦するカメルーン・デンマーク・オランダの国旗をもとに日比野さんがデザインをし、布で貼り付けて看板と旗を作成するというもので、たくさんの方に参加していただきました。特に親子での参加が多く、お子さんたちは、ボンドが手にいっぱい付きながらも楽しそうに布をベタベタ貼り付けている中、私も体を硬直させて慣れない針と糸を持って布と格闘しておりました。

看板は大きさが縦180センチ横400センチで3個作成し、完成まで約3時間でした。旗は、4枚の古着を繋ぎ合わせた大きな布を組み合わせてつくるもので、同じく各国対戦分3枚を作成したのですが、縫う作業が大変だったため、完成までなんと5時間くらいかかりました。完成した3枚の大きな旗を持って新市街へ集合、みなで記念撮影を行いました。その光景はみなさん、日本サポーターのようでした。

完成した看板は、ワールドカップ開催期間(6月11日～7月11日)まで、上通、下通、新市街で掲げられ、旗は日比野さんが南アフリカまで持っていくことになっています。

きっと、私たちの思いが選手たちに届いてくれるはず…。目指せ予選突破！

夜は、日比野さんを囲んでの打ち上げでした！みんな、慣れない作業だったせいか、体が痛い・きつい等つぶやきながらも、「大変だったけど、これを飲むためにやっているんだよねー」という達成感のある言葉もあつたり。打ち上げは楽しく晴れやかに真夜中まで続きました。(I.S)

【参加人数：約100人】



明後日朝顔種植式を行いました

2010.4.29

巨大な3枚のすてきなMATCH FLAGが出来上がったのち、新市街に集ったみなさんと日比野さんとともに、今年の熊本の明後日朝顔種植式が行われました。はやいもので、熊本参加は今年で4年目です。今年も昨年に引き続き、当館キッズサロンの大きな窓に、緑のカーテンをつくります。今年もすくすく育て、よい種がたくさんできるよう、見守ってくださいますね。植えた種は、2007年からの3年分の記憶を持つ熊本育ちの種と、2007年に金沢21世紀美術館で取れた全国ブレンドの種、そして、明後日朝顔の故郷、新潟助平の種をブレンドしており、この秋に採集される種は、それらの記憶を引き継ぎます。当館総合受付に、日比野さんからの参加認定書を掲示中です。(H.T)



アート・ド・ギャラン

熊本弁で「アート、どっこ？」の意です

国際文化交流会選抜臨書展

2010.3.9—3.14 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL:096-351-8411

国際交流会の選抜された書家の臨書展で、79人が出品している。中国や日本で著名な書家の作品を自分なりの考えて模写した作の展示である。招待作家の森山淡草さんは、黄庭堅(宋代)の諸上座帖で、草書体の変化のはげしい臨書だが、線のリズムや筆の切れがうまく明るい作になっていた。同じ招待作家の三嶋天鴻さんは、呉(三国時代)の天発神識碑である。「ただ今、この場所でのどのように刻するか、これぞ人生」という気持ちで淡墨で変化をつけダイナミックに大きく仕上げている。同じ招待作家の浦川草経さんは、王鐸(明時代)の「詩稿巻」で、複雑な線の交錯する筆使いをうまくさばき仕上げている。稲田春運さんは、米芾(北宋)の「多景楼詩冊」を臨書で、重厚な線や鋭い線のリズム感等がよくとらえられていた。紙質や押印まで丁寧に模されていた。岩本武士さんは、王献之(東晋)の姑比日帖である。潤渴をきかせて線の変化をつけ、思いきり自分なりの筆さばきで書いていた。会場は、書の古典を見直してよく努力された作品は、伝統の重みを感じさせていた。(S.K)



瑤瑤の會

2010.4.27-5.16 崇城大学ギャラリー
熊本市手取本町6番1号

崇城大学芸術学部日本画コースの1期生から現役学部生までの有志26名が出品した第1回目となるグループ展。各々の未発表の大・小それぞれの作品が出品されており、作品数も多く様々な雰囲気のある作品を楽しむことができる。発足のきっかけは、学年を越えて交流することで卒業生には作品を作り続けるモチベーションを、在学生には新たな刺激を促したいとの思いである。「発表の場があること、制作について話ができる仲間がいることは、卒業後、ひとりで制作を続ける作家にとって支えに繋がる」という、出品者で本展の代表でもある徳留永子さんの言葉からも、制作を続ける厳しさを乗り越える目標となつてほしいとの情熱が感じられた。今後、この会の中でどのような作品が生み出され、作家が育っていくのか。年月を重ねることが楽しみに感じられる展覧会であった。(S.Y)



第25回 維熊篆会「書法篆刻展」

2010.3.16-3.22 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL:096-351-8411

産経書会常務理事の平方研水さんの社中展で約60人が隷書や篆書に少字数書を軸や額装で約80点を展示していた。平方研水さんは「寶馬香車(白文)」を甲骨文で、静女其變(朱文)を金文で、力強い刀の切れ味を見せていた。米村静孝さんは牛乳で文字を書きよく乾かしてからあとで裏から墨をぬったという。黒い紙に白い甲骨文字が面白く表現されていた。迫水苑さんの「水苑印稿」は五つの扇面に変化に富む印影が美しい。嶋田薫窗さんは、紙をコーヒーで茶色に染めて黒色の墨で木簡書を見せて面白い。陶器や磁器で作った陶印や瓷印もあり多彩で楽しい会場になっていた。(S.K)



爽芽会展

2010.4.11-4.18 崇城大学ギャラリー
熊本市手取本町6番1号

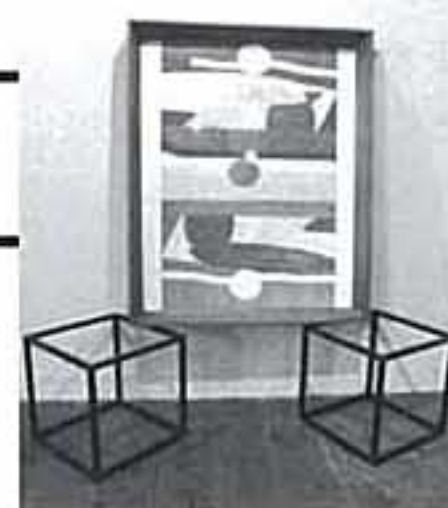
崇城大学洋画コース卒業生の14名による作品展。藤山木綿香さんの《僕の夜》は、やしの木の豊かな量感と人物の構成が、空間にひろがりをもたらす好印象である。武田理香さんの《ピノッキオの庭》では、多様なモチーフを画面に取り込んでおり、溢れるエネルギーを感じる事ができた。興梧守秋さんの《空の影に》は線の重なりが砂紋のように静かであるが自由に展開する世界を映し出していた。いずれの作品もさまざまな形で制作を続けてきた経験の蓄積が感じられる力作25点であった。(Y.H)



タカノヒロコ展

2010.4.23-5.2 はじめギャラリー
熊本市錦ヶ丘17番5号2階

熊本でイラストレーターとして活動している高野純子(タカノヒロコ)さんの個展。風通りのいいギャラリーに、抽象的に平面構成されたカラフルな作品が並ぶ。会場内には、キャンバス地に水彩で描いたものが見渡してみると違う作品の中に同じ抽象モチーフが見られる。それらは完成品をコピーし、一旦鮮やかさを落としたものに、線や色、下地を透かしながら布地を重ねる等、高野さん独特のカラーージュの手法が施された作品だった。一つの形から様々な可能性を広げていく作家の今後が楽しみである。(C.T)



Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ

アンケートに寄せられた感想
(抜粋)を紹介いたします。

アートパレード

- 風景などテーマごとに区別してあったのでよかった。(60代、女性、熊本市)
- 多勢の愛好家の作品が見られてよかった。(60代、男性、熊本市)

熊本の華人展vol.6アンケートより

- たくさんの流派があるので驚きました。どれも素敵です。漫画とコラボレーションは斬新で、「なるほど、そうきたかー」と思うもの、苦心の後が見えるものがあり、おもしろい企画ですね。(熊本市内、女性)
- 主人と花の大好きな母と来ました。今までのわたしの考えていた生けかたとは違い、大変驚き素敵だなと思いました。また見に来たいです。(鹿児島県、女性)
- 熊本にたくさんの流派があるのを知りませんでした。いろんな花が見られたので良かったです。(熊本市内、学生)
- 花を見るだけで気持ちが優しくなります。いろいろな生け方で楽しめます。(熊本県内、女性)
- 楽しく見させていただきました。久々に花好きの母との会話がはずみ、親孝行した気分です。花を見る時の楽しみ方がふえました。(熊本市内、女性)
- さわやかでシンプルな花や、明るく元気な花、その花によって雰囲気が変わっているようでおもしろかったです。(熊本市内、学生)

テキスタイル展

- 幟旗の絵は、昔を懐かしく思い出されました。五月の節句によく幟旗が見られましたが、現代は鯉のぼりも少なくなって残念です。沢山の幟旗が見られて、その迫力に感動しました。船のオブジェも雰囲気が出ていて素晴らしかった。(50代、熊本市、女性)
- 大漁旗のカラフルなデザインに圧倒された。(60代、熊本市、男性)

平川なつみ展

- 平川なつみの作品は妙に波長が合う、というか心が落ち着いた。今回入場していなかったらこの画家の存在なんて知らなかっただろう。運命とCAMKに感謝する。(40代、宮崎県、男性)

編集後記

日比野克彦さんの明後日朝顔プロジェクトへの熊本参加も今年で4年目。4月29日にマッチフラッグが不成功で終了した後、日比野さんを囲んでの明後日朝顔植え式が行われました。なんと、とってもすてきな絵入りのメッセージを日比野さんが熊本のために描いてくださいました！今年もキッズサロンに緑のカーテンをつくる予定です。すくすくと育つよう、みなさんも見守って下さいね。

編集長 富澤治子

テキスタイル展の入口を華やかに演出している八千代座の定式幕は、黒、もえぎ、柿色の3色ですが、お客様から「これがもえぎ色？なんだか違う…」なんて声もちらほら。実はもえぎ色って「萌黄」と「萌葱」、二つの色があることをご存知ですか。前者が皆さんご存知の淡い爽やかな緑色。そしてこの八千代座は後者の葱の方。深い緑色です。今回の出品作は江戸時代から現代作家までオールニッポンですが、色彩豊かな感性に、改めて日本人の底力を見たような気がします。

担当 大岩みゆき

●執筆者一覧

*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山

Syozan Kaneshiro (書道家)

森山淡草

Tanso Moriyama (書道家)

本田代志子

Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)

藏座江美

Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)

富澤治子

Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)

坂本顕子

Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)

芦田彩葵

Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)

矢加部咲

Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

大岩みゆき

Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

藤本真帆

Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

高橋知江

Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

杉谷和泉

Izumi Sugitani (熊本市現代美術館総務主査)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.47 2010年6月発行(初夏号) ◎無料◎

●発行人/桜井 武 編集長/富澤 治子 担当/大岩 みゆき

●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所 ●印刷/シモダ印刷

●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

SUITOTTO KUMAMOTO

【スイトット・クマモト】

CAMKフレンドインタビュー

*今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。

今年度最初のSUITOTTO KUMAMOTOは、無料のイベント情報誌、クマモトステージ&アートガイド『ドコサ?』を手掛ける、坂口美由紀さんに、熊本と舞台芸術への熱い想いを伺いました。



坂口美由紀:熊本県富合町(現熊本市)出身。
コモド・アート・プロジェクト代表
ステージガイド『ドコサ?』編集・発行人

『ドコサ?』を作り始めたきっかけはー

高校時代から吹奏楽部でクラシックが大好きでした。今でも、舞台上上がる人の気持ちを忘れないためにホルンを吹き続けています。大学を卒業後、クラシックや舞台芸術全般の仕事に就きたいと思い、コンサートを主催する事務所で働いていました。その時に、もっともっとクラシックや舞台を見る人の裾野を広げたい!という使命感に駆られて、仕事の傍ら『ドコサ?』を作るようになりました。今年で6年目になりますが、最初の頃は両面印刷のホチキス止めという、いかにも手作りの簡単な冊子を配っていました。そうしているうちにいろんな人から連絡が入るようになって徐々に今の形へと変化していきました。各地でコンサートやイベントがたくさん行われていて、「予想以上に熊本ってすごい!」と感動しながら寝る間もなく作っていました。苦労もありますが、ドコサを通じていろんな人と知り合ったり、仕事が舞い込んだり、自分から有名人に取材もできるのはドコサのおかげです。「熊本とクラシックが好き!」がドコサの全てです。愛がぎゅっともってるんです!

ストリート・アート・プレックスの一員でもある坂口さん。今後美術館とやってみたいことはー

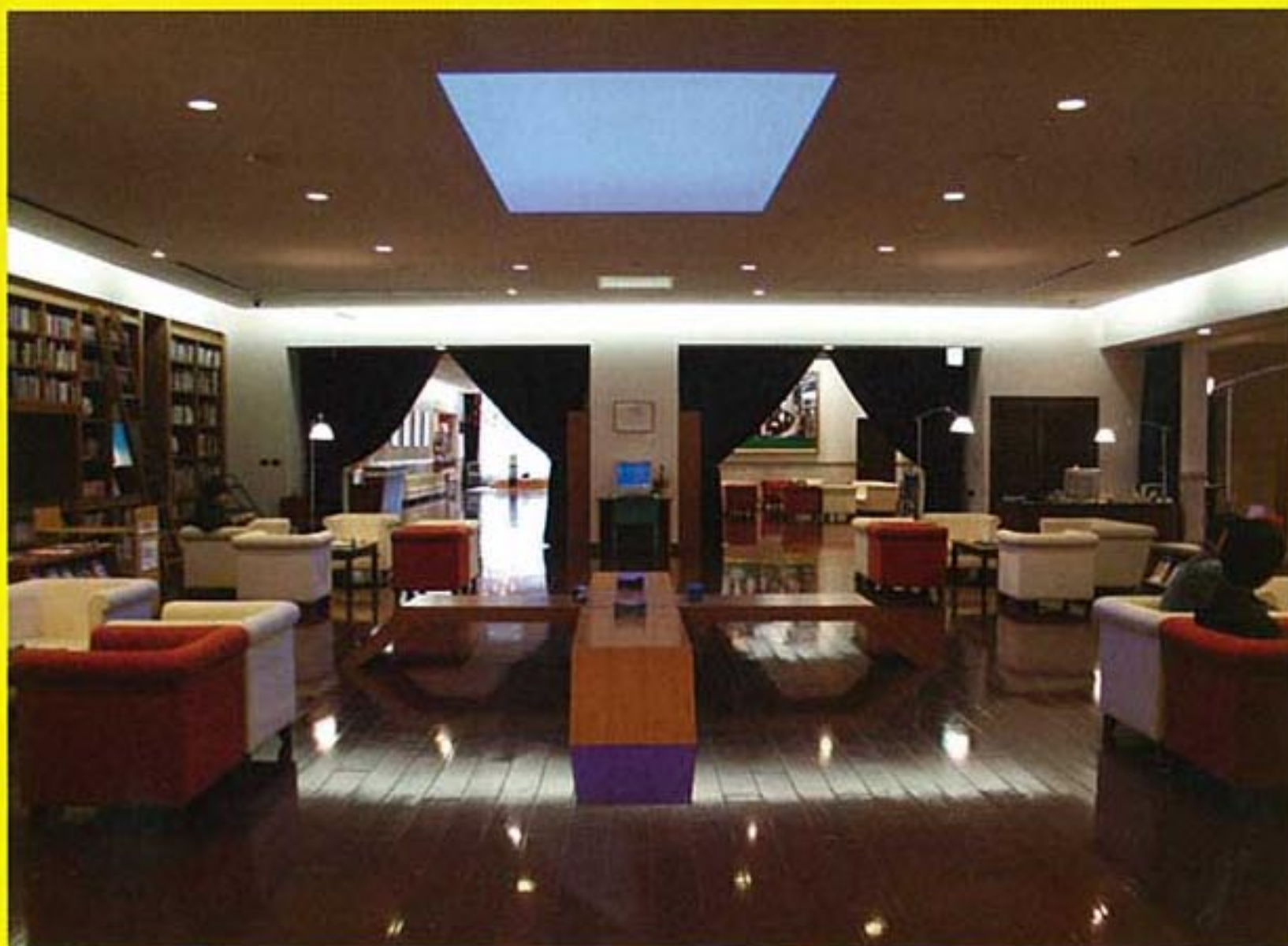
Street Art-plexとは、中心商店街の人達を中心に市民~表現者~行政が一体となって高質で多様な都市文化を生み出すコミュニティプロジェクトです。大道芸や、JAZZOPENなど、中心街のストリート上で、さまざまな音楽・表現活動を企画実行しています。またその活動の場のひとつとして、現代美術館とも度々協働事業を行っています。現代美術館のホームギャラリーには、アートがあって、ピアノがあって、あらゆる芸術を受け入れてくれる、垣根のない雰囲気があります。あの素敵な場所をもっと大事にするような、活かしていくような仕掛け、そこに集う皆さんと共にもっと積極的に関わっていけるような事を美術館と一緒にやっていきたいと思っています。美術だけではできない、音楽や舞台だけではできない、ジャンルを超えた何かを求めていきたい。どこにもない何かができるかもしれない挑戦の場とも思っています。

例えば、ショパンのコンサートでも、いろんな視点からショパンを表現するのはおもしろそうですね。ジャズでショパンを表現してみたり、パフォーマンス、生花、絵画などなど。演奏だけではなく、音楽とアートが融合して、今後はいろんな表現と音楽がコラボできたらいいなと思います。妄想と希望ですが。(笑)

ホームギャラリーからのお便りvol.1

名前の由来

熊本市現代美術館の「ホームギャラリー」の名前の由来、ご存知ですか? 自宅のリビングでくつろぐように、美術館で本を開き音楽を聴きながら過ごしてほしい、という意味での「ホーム」と、書籍とアートを同列で展示している場所という意味での「ギャラリー」からきています。それじゃ、書籍のほかにどんな作品が展示されているの?って気になりますよね。実は、ホームギャラリーの空間そのものが作品でもあるんです。と言ってもわかりにくいので、今回は天井にある作品についてご紹介しましょう。天井にあるのは、アメリカの作家ジェイムズ・タレルの作品《Milk Run Sky2002》です。毎晩7時30分から15分間かけてちよつとずつちよつとずつ光の色が変わります。その時間帯はホームギャラリーの照明を落とし、この光だけになるのでとても幻想的な空間になります。《Milk Run Sky2002》の下にはベッドが設置されているので(こちらのベッドも実は作品なのです。こちらのご紹介は次回!),横になって光のショーが楽しめるというワケ。光の色の変化だけでこんなに癒されるなんて本当に不思議です。美術館で癒しの15分間。ぜひお試しあれ。(EZ)



Art Kiss Letterの発行コンセプトについて

本紙(Art Kiss Letter アートキッスレター 通称 AKL)は、今年度をもって創刊より10周年をむかえます(創刊号 2001.7.15 発行)。また、本号は第47号として発行されますが、今年度中に、大きな節目としての第50号発行を迎える予定です。熊本市現代美術館プレオープニングイベントとして創刊されたAKLは、現在では、当館の活動を定期的に市民に報告する無料配布広報媒体として定着しつつあります。創刊第1号より、市内画廊等で開催される市民の芸術・文化活動を、学芸員等が紹介するという姿勢は、ずっと続けてまいりました。今年度から、より積極的に市民のみなさまの活動を、実際に当館での展覧会事業に結び付けていくことを目指し、市民ひとりひとりの創作活動の意欲を高め、ともに熊本の文化に対する意識を高めてゆくことを目的としてまいります。さらに、読み物としての内容の充実やデザイン性の高い紙面づくりを図り、当館の個性をひろく打ち出す無料配布広報媒体として機能させたいと、美術館スタッフ一同決意しております。どうぞよろしくお願いたします。